令和４年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校　定時制

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
1	学ぶことのよろこびの実感 〔主担当〕 学力向上G	①	一人一台端末を利活用した授業の展開	一人一台端末の利活用により、意欲的に学習に取り組めたと感じた生徒が Ａ：８０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	A （８３．３％） (昨年度 83.5%)	成　果：教員のＩＣＴ活用も活発になり、生徒の授業に対する意欲喚起につながっている。 課　題：少人数ならではの活用方法、一人一台端末活用の優位性を実感できる活用法を探る必要がある。 改善策：校内外の研修や活用事例ウェブサイトを参考に、本校の実態に即した活用方法について研修会を行う。
		②	授業内容の工夫を図る校内外の研修	授業に主体的に取り組んだ生徒が Ａ：７０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	A （８３．３％） (昨年度 64.7%)	成　果：例年、中間よりも年度末にポイントが下がる傾向があったが、今年度は最後まで８０％以上を維持することができた。 課　題：少人数ながら学習に課題を抱える多様な生徒が在籍し、対応に苦慮する面がある。 改善策：課題のある生徒でも比較的前向きに参加できている授業や取組について全員で情報を共有し、少しでも生徒の主体性を引き出す方策について検討・実践する。

学校関係者評価委員会の評価	・①②ともＡ評価というのは初めてではないか。取り組みの成果が認められるので今後も継続して行ってほしい。 ・少人数なので端末を利用した全員の意見集約等にはあまりメリットを感じないとのことだが、端末を用いた発信等活用方法の幅を広げてみてはどうか。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・Ａ評価を得たが、まだまだ改善の余地がある。特に、端末の利用については、授業の中で使うことは当たり前になってきているが、発表のツールとして、デジタル（スライドづくり）とアナログ（口頭発表）のハイブリットの活用を増やし、本校生徒が苦手とするコミュニケーション力を育成していく。

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）
２	社会人基礎力の向上 〔主担当〕 キャリア教育G	①	日常的な挨拶・言葉遣い指導	来校者や職員に対し自ら進んで挨拶をしていると答えた生徒が Ａ：８０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：４０％以上 Ｄ：４０％未満	B （７０．０％） （新規）	成　果：社会人の基礎として自ら進んで挨拶できている生徒は多い。日頃の教員からの声掛けが功を奏している。 課　題：場に応じた挨拶が不十分である。 改善策：生徒の個性にも関わってくるので、無理強いせず、挨拶できていることを褒めながら、長期的な展望を持って、よりよい挨拶になるよう粘り強く指導を継続していく。
		②	時間の自己管理意識を高める粘り強い指導	全授業の出席率 80%以上の生徒が Ａ：７０％以上 Ｂ：６０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	C （５０．０％） （昨年度 66.7%）	成　果：前期の出席率が６５％と昨年度並みを維持し高かった。 課　題：後期に入って１か月経過したころに欠席する生徒が増えた。 改善策：前期の頑張りを伝え、後期に入っても継続するよう一人一人に配慮した声掛けをする。後期に入って早期に学習面や生活面での課題を聴き取り、職員全員でサポートする。
		③	行事の事前事後指導の充実	自己有用感が高まったと感じた生徒が半数を超えた行事が Ａ：年１０回以上 Ｂ：８回以上 Ｃ：年６回以上 Ｄ：年５回以下	B （８回） （昨年度９回）	成　果：総合的な探究の時間や学校行事などを通して、周囲の人たちと協力しながら、自分自身の仕事を成就し、自己肯定感を持つ生徒は着実に増えてきている。 課　題：行事に積極的に参加する生徒と参加できない生徒との意識の差が大きい。 改善策：生徒のニーズを把握し、興味関心を喚起する行事を設定して参加を促し、他者と関わる機会を段階的に経験させることで自己有用感を高める。

学校関係者評価委員会の評価	・先生方の受容的な姿勢もあって、休みが長期的に継続している生徒はいないとのこと。この状況を維持してほしい。 ・生徒それぞれの個性があるので、指導が必要な生徒でも無理強いするのではなく、粘り強い指導をお願いしたい。 ・挨拶ができることと授業に出席することはリンクしている。生徒の生活全体への目配りを期待する。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・いずれの項目も改善するには生徒の自己肯定感を高めることが肝心である。何かができたという分かりやすい変化をとらえるだけでなく、継続できていることに対しても折に触れて評価することで、意欲の喚起につなげていく。 ・特に後期に入ってから環境等に変化のあった生徒へのサポートを全職員で行う。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果、課題、改善策等）

３	地域愛の育成 〔主担当〕 地域理解Ｇ	①	ふるさと学習の事前事後指導の充実	ふるさとに関する体験学習に積極的に取り組むことができた生徒が Ａ：９０％以上 Ｂ：７０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	B （８５．７%） (昨年度 91.6%)	成　果：里山里海保全活動も今年度で１０年目になりそれなりに定着してきた。今年度は宿泊を伴う活動や生徒の興味の持てる取組を行った。 課　題：他の生徒と協働することが苦手な生徒が若干おり、行事を休みがちになりやすい。事前指導にさらに工夫が必要である。 改善策：内容を精査し、活動回数を増やすことで躊躇なく参加できるようにする。
		②	協働的に活動する場面設定の充実	体験学習において協働的に取り組むことができたと感じた生徒が Ａ：９０％以上 Ｂ：７０％以上 Ｃ：５０％以上 Ｄ：５０％未満	B （８５．７%） （新規）	成　果：今年度は教員があまり介入せず、生徒だけの班編制を行った結果、生徒同士の横の繋がりが強化されたように思われる。 課　題：協働的に活動することが苦手な生徒への更なる対応が課題である。 改善策：生徒が興味関心を持って取り組むことができる内容とし、日頃から里山里海保全活動に対する意識を高めるようにする。
４	多忙化改善	①	業務の見直し･平準化による多忙感の解消	月平均の時間外勤務が１０時間を超えない教員の割合が Ａ：１００％ Ｂ：９５％以上 Ｃ：９０％以上 Ｄ：８５％未満	D （８３．４%） （新規）	成　果：１０時間を超えない教員の割合は６名中５名であった。出張を除く日常業務では１０時間を超えた教員はいなかった。 課　題：県外の大会引率などの見込みを踏まえて、目標設定をする必要があった。 改善策：校内の業務だけでなく、出張時の時間外勤務についても状況を把握し、次年度の目標設定を見直す。

学校関係者評価委員会の評価	・教室の中だけでは学べないことを体験できる行事が数多く行われており、生徒にとって良い経験となっている。家庭でも里山里海保全活動に関連した行事が話題になることが多い。 ・生徒が得意なことを披露したり、郷土の民話をベースにした寸劇などを発表したりするのはどうか。 ・時間外勤務については、日常業務で 10 時間を超える教員がいないということなので効率的にできている点は評価できる。超えた先生が一人いるということなので業務の平準化を更にすすめてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・学校行事は評価が高い。ただし、参加できていない生徒もいるので、生徒のニーズを精緻に聴き取り、行事の内容の改善、発表型の新たな行事の導入等を継続的に検討していく。